

## ボードレールの詩学おぼえがき (2)

横 山 昭 正

Notes sur la poétique baudelairienne (2)

Akimasa YOKOYAMA

### II.

ボードレールの詩世界においては、他者（たとえば恋人の女性、猫…<sup>1)</sup>）の眼のなかに、ほとんど無限に外界の事象を見出すことで、眼は大いなる空間を獲得し、この眼をのぞきこむ「私」（作品における話者。詩人自身とも、読者の私たちとも重なり合う部分がある）の視線は、一種の無限性に出会うことができる。

かれはこの美しい女の明るい眼の背後に無限を見たように思い、しだいに自分の目が広大な地平をとびかけるような気がしてきた<sup>1)</sup>。

(「ラ・ファンファルロ」)

現実には、あの小さな眼球をのぞきこむなら、私たちはそこに外界のあらゆる光と影が映っているのを見ることができよう。それゆえ自然（外界の事象の一切）が縮小されて、この小さな《穴》<sup>2)</sup>のなかに集中しているとも考えることもできる。

《「自我」の拡散と集中。すべてはそこにある<sup>4)</sup>。》この二重の方向を持つ運動が、一つの眼という存在（物）に、具体的にあざやかな形で見出される。ボードレールがあのよう

註 Abréviations: (『悪の花』引用詩のローマ数字による順序は、再版(1861)にもとづく。)

F. M.: Les Fleurs du Mal. N. F.: Nouvelles Fleurs du Mal. S. P.: Spleen de Paris.

- 1) 「猫」の詩は、『悪の花』のうちに三篇ふくまれるが (XXXIV. <Le Chat>, LI. <Le Chat>, LXVI <Les Chats>), XXXIV の「猫」では愛する妻と猫が一体化させられる。三篇とも、眼が重要な役割りを果している。
- 2) <La Fanfarlo>
- 3) <両眼は二つの穴> Les yeux étaient deux trous, [...]  
(<Un Voyage à Cythère> F.M. CXVI)
- 4) De la vaporisation et de la centralisation du Moi. Tout est là. (<Mon coeur mis à nu> I, 1. 以下, M. C. とする)

執拗に眼のイメージを描出しつづけたのも、《拡散と集中》、つまり「存在の全容」tout をそこに現出させることができるかもしれぬからなのだ。

こうした、眼の変容ともいわばいえる詩学を支えるものが、「窓」や「群集」で考察した、対象への一方的な「入りこみ」pénétration ともよぶべき態度であった。ここで当然、私たちが他者性と名付けたものとの衝突が予想されるが、この他者性の認識(=主観性の限界の認識)が逆にこの詩法をうながしたと考えるのが、実情にちかいだらう。むろん、「私」の視線と、これの支配をたえず逃れる他者性、つまり他者の主観性との闘いは、決して終らないであろう。(《我々の心の中で他者を求める欲望そのものとして生きている、あの永遠の渴》(リチャール<sup>5)</sup>)

この闘争については、前章の終りに、やや唐突な形ではあるがふれておいた。やがてそこに、絶対者の視線の問題がかかわってくる。なぜなら、他者の眼という場における「私」と他者との、いわば地上的な合一は、束の間の、不充足なものとしてか成立しないからである。(これについては、後に、たとえば「通りすがりの女に」のところで詳しく考察されるだろう。)

### III.

そしてこの時からである、[...]

眼は空にむけて、ぼくが穴におちたのは<sup>6)</sup>。

(「声」)

ボードレールの現実世界での強いられたあり方、また精神構造のもっとも基本的で典型的なカタチが、この二行にはきわめて明確にうち出されている。ボードレールの詩における眼のイメージの重要性も、そのイメージをめぐる様々なドラマも、一切がここから始まるといってよい。私たちは実にしばしば、このような仰向いた視線に出会うであろう。

自身は、人間の失墜、墮落にかかわる不幸と悪の深淵に救いがたいまでにおちこんでゆきながらも、ボードレールの人物の眼は、決して頭上をあおぎみることをやめない。そのもっとも大規模で異様な光景を、私たちは、『阿片吸飲者』の四「阿片の責苦」にみることができる。

5) J.-P. RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

6) <La Voix> N. F. M. VII

Et c'est depuis ce temps que [...]

Et que, les yeux au ciel, je tombe dans des trous.

そこで、確か既にかれが人間の顔の庄制と呼んでいたものが現われた。「そのとき、《大海原》のゆれ動く波の上に、人間の顔が現われ始めた。海は天空を振り仰いでいる無数の頭でしきつめられているように見えた。狂おしげな顔、懇願する顔、絶望した顔が、幾千幾万となく、幾世代にも幾世紀にもわたって、海面で踊り始めた<sup>7)</sup>。…

(強調はボードレール)

この、《無限への嗜好》<sup>8)</sup>につきうごかされる《阿片吸飲者》のみる夢にあらわれる視線が、すべて何らかの烈しい渴望に充たされたものであることは、注目しておく必要がある。

ボードレール自身が、己をふりかえるかのようにして描きだしている、阿片吸飲者・ディ・クインシーの少年期の思い出に、空をふりあおいで、神の姿、その恵みを求める視線があらわれる。

一つの回廊、一つの穹窿が青空をこえて開かれ、無限ののびた道がそこに通じていた。青い波に乗ってかれの魂は昇り、その波とかれの魂とは神の玉座へと翔り始めたが、懸命なかれの追跡にもかかわらず、玉座はたえず遠のいて行った<sup>9)</sup>。

その眼は空の中、霧の中をさまよっては、捉えがたい何かのものを追い求め、執拗に空の深みに凝らされた。そして、神の特別の恩寵によってあるいはいま一度現われることを許されているかもしれない愛する面影を、そこに見出そうとした。こうした、迷路のように出口もなく曲りくねった苦悩の物語 […] <sup>10)</sup>

引用がすこし長くなったが、詩人はこのように、空、しかも青い空の深奥に、絶対者の無限の力のあらわれを想定する。

だが、地上の、有限の存在である人間には、この無限を捉えきれない。

輝かしい玉座のさまが眼にうつる天の方へ

詩人は心晴れやかに敬虔な手をさしのべる<sup>11)</sup>

(「祝福」)

7) 《Un Mangeur d'opium》 IV. 《Tortures de l'opium》

8) 《Le Poème du haschisch》 I. 《Le Goût de l'infini》

9) 註7) におなじ

10) 註7) におなじ

11) 《Bénédiction》 F. M. I.

Vers le ciel, où son oeil voit un trône splendide,  
Le Poète serein lève ses bras pieux,

無益にもぼくは望んだ、空間の  
涯と真中を見出そうと。  
何ものともしれぬ火の眼にみつめられ、  
ぼくの翼の砕け行くのをぼくは感じる。

[…]

深淵はぼくの墓になるだろう<sup>12)</sup>。

(「イカルス of 嘆き」)

《天のいかなる眼もさし透らない》(「償いようのないもの<sup>13)</sup>」) 地獄へと墮ちてゆく、ボードレールの存在にとって、《高みと低みの間に成立する関係をのぞくと、他に根本的な関係はない》。この《転落という関係》(以上ブーレ<sup>14)</sup>)を、この上なく鮮烈に私たちにみせてくれるのが、ボードレール詩に頻出する眼のイメージなのだ。

そんなわけでボードレールの存在は、空の高みから墜落したもの、いわば一度死んだもの、見る能力を失ったものである。現前する外界の事象を、明晰に識別し、把握すること、とくに光を所有することを禁じられた存在である。これは何よりもまず、眼が光を失った存在であり、ついで、この「盲人」を、「天」にまでつづく、眼の闇と同質の闇がとりかこむ。

暗黒の眼球をどこへともしれず差向けて。

彼らの眼は、神々しいきらめきが去り、遠くをみつめているかのように、空へ向けられたままだ。

[…]

12) 《Les Plaintes d'un Icare》 N. F. M. XV

En vain j'ai voulu de l'espace  
Trouver la fin et le milieu;  
Sous je ne sais quel oeil de feu  
Je sens mon aile qui se casse;

[...] l'abîme

Qui me servira de tombeau.

13) 《L'Irrémédiable》 F. M. LXXXIV

Où nul oeil du Ciel ne pénètre;

14) G. POULET, 《Essai critique》 in *Qui était Baudelaire*, Skira, 1969.

こうして彼らは横切っていく、無限の暗闇を、  
永遠の沈黙と血つながりの闇を<sup>15)</sup>。[…]

(「盲人」)

《盲人》の眼は、失われた《神々しいきらめき》の発源した空の高みを見上げつつける。つまり《太陽の思い出<sup>16)</sup>》を、《原始の火の聖なる炉<sup>17)</sup>》から汲まれた光を捉えようとする。すなわち、彼らの眼が探すものは、今ここにはない過去である。ボヘミアンの男たちの眼が《重たくなった》のは、《不在の幻影への暗たんとした愛惜<sup>18)</sup>》の念からである。今ここにはない幻影への愛惜のこもった眼が、《空》をさまようわけなのだ。

男たちは、[…]

今ここにはない幻影<sup>ツメール</sup>を暗たんとした愛惜の気持ちで追い求める。  
その眼は重たくて、天の彼方へさまよい出る<sup>18)</sup>。

この、過去を渴望する視線について、プーレは《ボードレールはよくこうした長い視線を背後になげることがある<sup>19)</sup>》と指摘して、阿片飲みにかんするボードレールの記述を引いている。それを私たちも読んでみよう。

15) 《Les Aveugles》 F. M. XCII

Dardant on ne sait où leurs globes ténébreux,

Leurs yeux, d'où la divine étincelle est partie,  
Comme s'ils regardaient au loin, restent levés  
Au ciel; [...]

Ils traversent ainsi le noir illimité,  
Ce frère du silence éternel. [...]

16) 《Les Plaintes d'un Icare》, *op. cit.*

[...]des souvenirs de soleils.

17) 《Bénédiction》

Puisée au foyer saint des rayons primitifs,

18) 《Bohémiens en voyage》

Les hommes [...]  
Promenant sur le ciel des yeux appesantis  
Par le morne regret des chimères absentes.

19) G. POULET, *op. cit.*

阿片飲みは、朝こえてきた田野を夕方ふりかえる旅人だ。その、今は地平に気化している土地を横切っていた間、脳髄にとりついていた夥しい幻想を涙ぐましくも悲しい気持ちで思い出す旅人だ<sup>20)</sup>。

ここで、『悪の花』に出てくる《見る》voir という動詞の性質について調べてみよう。すると私たちは、この動詞が《夢みる》rêver あるいは《想像する》imaginer の意味でもちいられることが多いのに気づかされる。しかもこの、現実存在を直視してこれを、(ラシーヌの劇における視線の働きについてスタロバンスキーが述べたように<sup>21)</sup>)《認識する》《知る》、そういった役目をになわされていない voir が、まず大抵は過去に向う視線をともなうことがわかる。すなわち、《思い出す》se souvenir; se rappeler, とほとんど同様に受け取ることができるのである。《ぼくは思い出す! ぼくは見た […]》(「ロマン派の落日<sup>22)</sup>」)《思い出してごらん、僕らが見た物を […]》(「腐肉」)においては、このように、「見る」と「思い出す」が結合させられて、過去の情景を喚起するきっかけとなる視線が提出されている。思い出す視線である。

現実の状況の認識を示す場合も、数が多くはないにしろあるが、つぎのように、過去形の場合が殆どである。——《もえさかるこの眼をついに開いた時、／ぼくは見た、みじめなぼくの仕事部屋を》(「パリの夢<sup>24)</sup>」)

「異邦の匂い」の場合が、この動詞「見る」の本来の働きにそうものと思われるが、ここでも、現在形のもとに展開する対象に密着して、その展開と同時に動く視覚の働きは認められるにしろ、その対象自体が幻想的で、いわば夢みられる情景なのである。

ぼくはみる、単調な太陽が火ともえてまぶしい  
幸福の岸辺が拡がるさま。

[…]

20) 《Un Mangeur d'opium》

21) J. STAROBINSKI, 《Racine et la poétique du regard》, in *L'oeil vivant*, Gallimard, 1970.

22) 《Le Coucher du soleil romantique》, *Les Epaves*, I

Je me souviens! J'ai vu [...]

23) 《Une Charogne》 F.M. XXIX

Repelez-vous l'objet que nous vîmes, [...]

24) 《Rêve parisien》 F.M. CII.

En rouvrant mes yeux pleins de flamme

J'ai vu l'horreur de mon taudis,

ぼくはみる、海原の波にゆられて、今もなおぐったりと  
 疲れはてた帆やマストが、立ちならぶ港のながめ<sup>25)</sup>。

(「異邦の匂い」)

私たちは、先に、ベンヤミンのことは、《ボードレールは、見る能力が失われた、と  
 言ってよいような眼を描く》を引いたが、上の引用詩の場合、そうした眼の極限のかたちが見ら  
 れる。すなわち、《ぼく》が異邦の情景を見る (= 思い出す) とき、《ぼく》は《両の眼を  
 閉じて<sup>26)</sup>》いるのである。(これについては、福永武彦「詩人としてのボードレール」(『ボ  
 ードレール全集』、人文書院版、I, p. 24) に、《ボードレールの詩的世界の基礎をなす想像  
 力の出発点をなしている》という指摘がある。)

#### IV.

「イカスの嘆き」ですでにみたように、詩人は、太陽の眼差しに、青空の無限に苦しめ  
 られ、地上を、盲人のように《這っていく<sup>27)</sup>》が、それというのも、《無限の切先ほど鋭い  
 切先はない<sup>28)</sup>》からであり、《天空の深さが私を茫然とさせ》、《その透明さが私を焦立た  
 せる<sup>30)</sup>》からである。《空と海との無量の拡がりのうちにまなざしを沈めるあの深いよろこ  
 び<sup>31)</sup>》が、やがて、不快と苦痛にかかわることになる。

したがって、ボードレールの存在は、《至るところに、一様に、不思議な恐怖におそわれ  
 て、／おののく眼によってしか頭上を眺めることはない<sup>32)</sup>。》

ボードレールは、なんとたびたび、不安と動揺にみちた眼のイメージを描いたことだら

25) 《Parfum exotique》 F. M. XXII

Je vois se dérouler des rivages heureux  
 Qu'éblouissent les feux d'un soleil monotone;

[...]

Je vois un port rempli de voiles et de mats  
 Encore tout fatigués par la vague marine,

26) 《*id.*》[...], les deux yeux fermés, [...]

27) 《Les Aveugles》 F. M. XCII

Vois! je me traîne aussi! [...]

28) ~31) 《Le Confiteor de l'artiste》 S. P. III

32) 《Le Couvercle》 N. F. M. XVI

Partout l'homme subit la terreur du mystère  
 Et ne regarde en haut qu'avec un oeil tremblant.

う。《お前の眼の深淵はおそろしい想念にみち […]》<sup>33)</sup>》。《混乱にみちたぼくの眼の中に》<sup>34)</sup>》。《嵐にみちたこの眼のうちに》<sup>35)</sup>》。《嵐にかき乱された眼で彼女は […]》<sup>36)</sup>》。《嵐をはらんだ鉛色の空》<sup>37)</sup>》。《狂気に炎ともえる眼差して》<sup>38)</sup>》。

眼は想いを湛え、フランスの汚れた霧の中に、  
ありもしない椰子の樹の、きれぎれの幻を追い求めながら<sup>39)</sup>。

この、「マラバール生れの女に」とほぼ同様なイメージが、「白鳥」にもある。

ぼくは見る、この奇怪な宿命の神話である不幸な鳥が、

オウィディウスに出る人間のように、時折、空の方へ、  
皮肉な空、残酷なまでに青く晴れた空の方へと  
けいれんする頸の上で渴えに喘ぐその頭をのぼすのを、  
あたかも神に非難の言葉を浴せかけるかのように！

[…]

ぼくは想う、一人の黒人女を、やせ衰え、肺を病んで、  
泥濘の道を行き悩み、兇暴な眼で、彼女が

33) 《Danse macabre》 F.M. XCVII

Le gouffre de tes yeux, plein d'horribles pensées,

34) 《La Destruction》 F.M. CIX

[...] dans mes yeux pleins de confusion,

35) 《Bribes》

[...] à cet oeil tout chargé de tempêtes

36) 《Femmes damnées》

Elle cherchait, d'un oeil troublé par la tempête,

37) 《A une passante》 F.M. XCII

Dans son oeil, ciel livide où germe l'ouragan,

38) 《Sur Le Tasse en prison d'Eugène Delacroix》 *Les Epaves*, II

Mesure d'un regard que la terreur enflamme

39) 《A une Malabaraise》 N.F.M. IV

L'oeil pensif, et suivant, dans nos sales brouillards,

Des cocotiers absents les fantômes épars!



途方もなく巨きい霧の壁の背後に、  
 壮麗なアフリカの今ここにはない椰子の樹を求めるのを<sup>40)</sup>。

(「白鳥」)

ここでは、《ぼくは見る》と《ぼくは想う》のちがいについて考えることで、ここでの視線の意味するところをさぐりたい。白鳥と黒人女の眼のイメージについては、後でふれることにしよう。

まず《ぼくは見る》Je vois の「見る」voir であるが、これは、過去にさかのぼっての現存、あるいは、過去に「見た」ことのある白鳥を想起している、と取ることができる。というのも、上に引かれた白鳥のイメージがあらわれる前の連で《ある朝》一羽の白鳥を《ぼくは見た》je vis となっているからである。(なおこれも、voir という動詞の働きについてふれた中で、「思い出す」と殆んど同義に用いられている、と述べたものの一例である。) 引用詩の後半は、「白鳥」のⅡ、第四連にあたるが、このⅡは、二連、四連、六連がそれぞれ、《ぼくは想う》という行をふくんでいる。これは重要である。

同じ連を引用したブーレは、つぎのように言っている。《いまやボードレールの詩は現前の詩ではない。わたしの言うのは事物の現前、事物の震動の中での自己の現前、空間の現前のことだ。あらゆるものが、長城のようにつづく霧の広大な壁のむこうに引きこもってしまった。》これは、黒人女にとっての視覚の対象についてと同様に、《ぼく》にとっての黒人女という喚起された存在についても言いうることだと考えられる。《ぼく》は、黒人女を《見る》のではない、《思う》のだから。

この「白鳥」のⅠ、冒頭にも、《アンドロマックよ、ぼくはあなたを思う!》とあるが、

40) <Le Cygne> F. M. LXXXIX

Je vois ce maleureux, mythe étrange et fatal,

Vers le ciel quelquefois, comme l'homme d'Ovide,

Vers le ciel ironique et cruellement bleu,

Sur son cou convulsif tendant sa tête avide,

Comme s'il adressait des reproches à Dieu!

[...]

Je pense à la négresse, amaigrie et phtisique,

Piétinant dans la boue, et cherchant, l'oeil hagard,

Les cocotiers absents de la superbe Afrique

Derrière la muraille immense du brouillard;

これについて、ボンヌフォアはつぎのように書く。《ボードレールはこのアンドロマックを創造するのではない。彼は彼女のことを《思う》のだ。そしてこのことが意味するのはつぎのことだ、意識の外に存在があること […]》<sup>41)</sup>》

ボードレールの視線は事物の不在、不在の事物にゆきあたることになる。自我はそうした《不安定な条件において》<sup>42)</sup>》(ボンヌフォア) 個々の実存を再発見する、とボンヌフォアはボードレールの選択を高く評価するが、これは困難で苦悩にみちた行為であるだろう。先の評言につづいて、プーレは、《膨れあがった時間と空間とは、喜びであるどころか、空虚、欠如、苦痛となる》<sup>43)</sup>》と言っている。「芸術家の告白の祈り」のところで、無限に傷つけられる視線について述べたと同じ事情がここには語られている。ふたたびボンヌフォアにもどって言えば、個々の実存、いいかえるなら、この事物、この存在、つまり《死すべきものでしかないものに至上の価値を与え存在たちを死の地平のなかに立てる》<sup>44)</sup>》と決意した者のいわば宿命であるといえよう。ボードレールが、失われた過去をもとめてさまよう瀕死の白鳥、瀕死の黒人女の眼を、視線を描出するのも、この故になのだ。

## V.

《二つの過去という構造ほどボードレールが厳密に理解していたものはない。輝かしい過去と、それにつづくもう一つの、暗い、償いようのない過去。》<sup>45)</sup>》とプーレは書く。ボードレールにおいて、視線が過去に向って差しのばされる場合がきわめて多いが、このときつねにこのような二種類の過去がうかびあがってくる。たとえば「旅のボヘミアン」では《今ここにない幻影を暗たんとした愛惜の気持ちで追い求める》男達が出てくるが、この不在の幻影とは、輝かしい過去の思い出であるのだろう。それは同時に、現在もふくめてある根源的な《過ちの後で流れすぎた過去、悪しき過去》<sup>46)</sup>》(プーレ)をも暗示している。《暗たんとした愛惜の気持ち》によって《重たくされた》視線は、この過去の現在に至るまでの欠如、不充足を背負わされた視線である。《多くの老人が酒場のテーブルの上につむきながら、いまでは消えてしまった人びとに囲まれて生きているおのれの姿を目に浮かべている。》<sup>47)</sup>》《老人の陶醉は消え失せたおのれの青春から生まれる。》<sup>48)</sup>》この眼は、不充足を底に秘めた

41) Y. BONNEFOY, 《L'acte et le lieu de la poésie》, in *L'Improbable*, Mercure de France, 1959.

42) *id. ibid.*

43) G. POULET, 《Baudelaire et le cercle》, in *Les métamorphoses du cercle*, Plon, 1961.

44) 註41) におなじ。

45) 《Essai critique》, *op. cit.*

46) *id.*

47), 48) cités par G. POULET, in *Etudes sur le temps humain*, Plon, 1966.

充足の、恍惚の時間を生きている。

彼女は探していた、嵐に乱れた眼で  
すでに遠い彼女の純真さの空を  
朝こえて来た青い地平線の方へ  
頭をむける旅人のように<sup>49)</sup>。

(「呪われた女たち」)

ここで見るという行為は、対象をはげしく所有しようとする暴力的な眼差しを伴ってはいない。ボードレールの人物の視覚も、ラシーヌにおけると同様、渴望行為をあらわしているが<sup>50)</sup>、これほどいわゆる受身の性格を示す視覚もないだろう。荒々しく張り出し、問いつめるかたちで探り、求めるということがない。その眼は内部の欲求、動揺、苦悩にくもり、不安な問いかけを宿してはいるものの、積極的に対象を識別し、解体し、再構成してこれを己のものにしようと努めることがない。これが、エリュアールに非常にしばしばあらわれる眼とは異なる点である<sup>51)</sup>。ボードレールの人物の視線は、対象の視線と相互に滲透し合うような、能動的で、生き生きとした動きをみせることはまれである。対象に執着はしているのだがその度合いが強ければ強いほど、いたずらに内部の混迷が露呈されてくるばかりだ。この視線は結局、主体の内部にしか向けられていない、というか、主体自らの欲求に過度なまでに浸されて、重たくその混迷に濡れ、かろうじて対象の周辺とおぼしきところを《さまよう》しかない。

思いにふけり砂に臥す家畜のように  
彼女たちは水平線の方へ眼をむける<sup>52)</sup>、

(「呪われた女たち」)

49) 《Femmes damnées》-Delphine et Hippolyte  
Elle cherchait, d'un oeil troublé par la tempête,  
De sa naïveté le ciel déjà lointain,  
Ainsi qu'un voyageur qui retourne la tête  
Vers les horizons bleus dépassés le matin.

50) 註49) および40), また 《Les Aveugles》 最終連の「探す」chercher という動詞に注目せよ。

51) たとえば 《La courbe de tes yeux,...》, in *Capitale de la douleur*, N.R.F., 1926.

52) 《Femmes damnées》 ただし註49) とは別の作品。  
Comme un bétail pensif sur le sable couchées,  
Elles tournent leurs yeux vers l'horizon des mers,

《思いにふけり》は、pensif の訳。既出の、「マラバール生れの女に」でも、《眼は想いを湛え》l'oeil pensif となっており、後者ではまだ、「盲人」や「呪われた女たち（デルフィーヌとイポリット）」でみたように、ボードレールの人物たち（失墜した地上的存在）の一人に他ならない黒人女（「白鳥」における黒人女と同様に）は、失われた対象を《追い求め》ていた。しかしここでは既に、対象は定かでない。視線はわずかに方向を示されるにとどまる。苦痛であるにしろ、逸楽であるにしろ、とにかく内なる思いに混濁した視線はさまよいの視線となる。月の脆弱な光輝はほとんどそうした視線のあらわれであるだろう。この視線がとらえる対象は、外界の事象か、視線そのものが生み出した幻想か、正しく決定し得ない。

息もたえだえに、月は気を失っている様子で、  
満開の花のように、蒼穹を立ちのぼる  
白い幻影グイゾンに、眼をさまよわせる<sup>53)</sup>。

(「月の悲しみ」)

さまよいの視線は、空間に拡散し、衰弱した視線となる。この視線は、太陽の強烈な光線には耐えることができない。詩人は、この月のもらす涙、《オパールのかげらのように虹色にかがやく／その蒼白い涙を、手のくぼみにすくいとって》

太陽の眼から遠い心のなかにしまう<sup>54)</sup>。

かつては、イカルスのように、太陽の《火の眼》oeil de feu をものともせず、広大な空間を飛翔した詩人の視線は、いまや秋の太陽の眼差し、《きいろい甘い光線<sup>55)</sup>》にしか耐えることができないかのようだ。

53) <Tristesse de la lune> F.M. LXV

Mourante, elle se livre aux longues pâmoisons,  
Et promène ses yeux sur les visions blanches  
Qui montent dans l'azur comme des floraisons.

54) <id.>

Dans le creux de sa main prend cette larme pâle,  
Aux reflets irisés comme un fragment d'opale,  
Et la met dans son coeur loin des yeux du soleil.

55) <Chant d'automne> F.M. LVI

De l'arrière-saison le rayon jaune et doux!

ぼくは情熱を憎む、そして精神はぼくに痛い！  
ただやさしく愛し合おう。[…]

[…] おお青ざめたひなぎくよ！

お前もまた秋の太陽ではないのか、ぼくのように、  
おおぼくの白い、ぼくのつめたいマルグリットよ？<sup>56)</sup>  
（「秋のソネ」）

かつては、《新鮮そのものの姿に昇る<sup>57)</sup>》朝の太陽を讃美したこともある。

ぼくは思い出す。ぼくは見た、花、泉、敵、すべてが  
太陽の眼差しの下、動悸する心臓のように恍惚となるのを<sup>58)</sup>。  
（「ロマン派の落日」）

万物の生命の源である太陽、その太陽の眼差しのとどかない心のなかに、詩人は月の眼からこぼれる涙をしまうという。この心を浸すものはしたがって闇にはかならない。

だが退いてゆく神を追うぼくのわざは空しい。  
抗うべくもない「夜」、黒く、湿り、不吉で、  
戦慄にみちた「夜」が、その支配を布く<sup>59)</sup>。

56) 《Sonnet d'automne》 F. M. LXIV  
Je hais la passion et l'esprit me fait mal!

Aimons-nous doucement. [...]

[...]—O pâle marguerite!

Comme moi n'es-tu pas un soleil automnal,

O ma si blanche ô ma si froide Marguerite?

57) 《Le Coucher du soleil romantique》 *Les Epaves*, I  
Que le soleil est beau quand tout frais il se lève,

58) 《*id.*》

Je me souviens!...J'ai vu tout, fleur, source, sillon,  
Se pâmer sous son oeil comme un coeur qui palpite...

59) 《*id.*》

Mais je poursuis en vain le Dieu qui se retire;

L'irrésistible Nuit établit son empire,

Noire, humide, funeste et pleine de frissons;

だがこの夜は、衰弱した精神、《疲れ果てた敗残の精神<sup>60)</sup>》をなぐさめ、優しい休息をもたらしもする。ボードレールは、いかにしばしば《愛撫するような眼差し、愛による優しい把握<sup>61)</sup>》(スタロバンスキー)を渴望する、《不幸な眼差し<sup>62)</sup>》 regard malheureux を描き出したことだろう。

愛する子の美しい眼よ、そこからは「夜」のように  
心地よい、優しげなものがしみ出し、逃げてゆく！  
美しい眼よ、お前たちの魅力ある闇をぼくに注いでおくれ！

愛する子の大きな眼よ、[...]

愛する子のその瞳は、おお無窮の「夜」よ、  
お前のように暗く、深く、涯しなく、お前のようにきらめく！<sup>63)</sup>

(「ベルトの眼」)

すでに何度か言及した「猫」における眼の拡大化の極限の表出がここにはある。このいわば夜の瞳ともいうべきイメージが、女の存在そのものを代表し、女↔眼↔宇宙というつながりがここに成立させられている。

休息をもとめる詩人の視線が対象の眼のなかに見出すものの特質をさらに探ってみよう。まず、彼のさまよいの視線を包み、抱きとめてくれる眼は大きくなければならぬ。この例には事欠かない。《愛情をこめたやさしく大きかったあの眼から》(「幻影」<sup>64)</sup>) 《その大き

60) 《Le Gout du néant》 F. M. LXXX

Esprit vaincu, fourbu! [...]

61) J. STAROBINSKI, *op. cit.*

62) 《Ebauche d'un épilogue pour la 2me édition des F. M.》

63) 《Les Yeux de Berthe》 N. F. M. X

Beaux yeux de mon enfant, par où filtre et s'enfuit  
Je ne sais quoi de bon, de doux comme la Nuit!  
Beaux yeux, versez sur moi vos charmantes ténèbres!

Grands yeux de mon enfant, [...]

Mon enfant a des yeux obscurs, profonds et vastes  
Comme toi, Nuit immense, éclairés comme toi!

64) 《Un Fantôme》 F. M. XXXVIII, IV 《Le Portrait》

De ces grands yeux si fervents et si tendres,

な眼に詩人を黒んぼよりも素直にさせて》(「植民地生れの一夫人に」<sup>65)</sup> 《切れながなあなたの眼の緑がかったひかり》(「秋のうた」<sup>66)</sup>)

この最後の例について、ヒューバートは次のように言っている。《[...] 彼が愛人の「切れながな眼のひかりを好む」のはそのためである。なぜなら、横に延びるもの、光を拡げるものはすべて、持続の延長の幻覚を与えるからだ<sup>67)</sup>。》ヒューバートは、この少し前で、《時間の停止の幻覚》とも言っている。ここでの時間とは、この世での墮落した汚辱にみちた生存とそれについての意識をさすと思われる。大きな眼のなぐさめに、《時間の観念は消える。》(プーレ<sup>68)</sup>)だが、これも幻覚にすぎない。

つぎに、夜と水の関わりから、眼と水の結びつく意味をたずねてみよう。これはついには、水と太陽の結合したイメージを生み出すに至るであろう。

上の引用詩中に、《闇をぼくに注いでおくれ!》とあるがこの *verser* ということばは、*plonger* (沈む) ということばとともに、ボードレールの愛好する動詞である。沢山の例が見出されるが(すでにふれた「美の讃歌」では《お前の眼差しは／善行も犯罪もまぜ合せて注ぐ》とある——この1例にここでは止めておきたい)、この「注ぐ」*verser* は、水や酒のような液体をも同時に喚起させる。同じ引用中の「滲み出す」*filtrer* という動詞も同様であり、夜の闇のもつ湿り気を暗示している。《[...] 湿った [...] 「夜」》(「ロマン派の落日」<sup>69)</sup>)

涙がすでに幾分かそうであるが、眼の闇が液体とむすびつくことで、自我は他の者の眼の奥ふかくひそむ秘密、心の深層といったものにふれることが許されるだろう。この結合は誰にも分るように、セクシュアルなものでもあるわけである。液体の流動性と、なめらかさが、自我の渴望の眼差しの働きを容易にする。なによりも、衰弱した、さまよいの視線をぬらし、その渴きをいやすはずである。(「噴水」<sup>70)</sup>) という作品が、《お前のきれいな眼は疲れている、可哀想な恋人よ! / その眼をそっといつまでも閉じておいで》という導入部で始まることにも注目しておいてよい。その上、この作品は、恋人との愛の行為の情景でもある。

65) 《A une dame créole》 F. M. LXI

Que vos grands yeux rendraient plus soumis que vos noirs.

66) 《Chant d'automne》 F. M. LVI

J'aime de vos longs yeux la lumière verdâtre,

67) J.-D. HUBERT, *L'Esthétique des "Fleurs du Mal"*, Pierre Cailler, 1953.

68) *Etudes sur le temps humain, op. cit.*

69) 註59) に引いてある。

70) 《Le Jet d'eau》 N. F. M. IX

Tes beaux yeux sont las, pauvre amante!

Reste longtemps, sans les rouvrir,

しかしながら、この合一も、つかの間のものであることを、ボードレーは知っている。ところで、この verser される（注がれる）眼（視線）とそれをうけとめる、主体〔の視線〕とのかたちづくる情景から、私たちが思いうかべるものは、高みから低みへの情愛、慈しみの流れ、そうした運動である。前に私たちが、主体の視線の受身的性格を指摘した理由の一端がここにあるのである。これは、サルトルが「大女」の例を引きながら説明したように、《寛大な眼か〔憤怒の眼〕によって庇護される<sup>71)</sup>》ことを願望している視線だ。愛する対象（女性、猫…）の、ことに眼の絶対化、神聖化の傾向についてはすでに述べたが、時には間歇的に、その絶対的な眼から投げられる眼差しの火で焼きつくされることを願うにせよ（「しのび語り<sup>72)</sup>」）、ボードレーはその視線の火を、何らかのヴェールでおおい、火の光と熱を和らげることに心をくだくだろう。

ボンヌフォアが《この世でもっとも美しい詩篇<sup>73)</sup>》とたたえる「ぼくがどうして忘れよう…」では、《大きく開いた眼のような》太陽が《流れ出し》ている。

太陽は、夕べには、輝かしく流れ出し、  
 とききらめく火花のくだけちる硝子窓の向うの、  
 もめずらしげな大空に、大きく開いた眼のように、  
 ぼくたちの長い静かな晚餐を、見守っていたようだった<sup>74)</sup>。

傑作として名高い「族への誘い」にも同様な水と眼と太陽のむすびついた美しい部分がある。それはさらに、愛する女性の眼と涙にも重ね合されている。（つぎの引用部分の手前で、よびかけた対象（《わが子よ、妹よ》）が一つの国にたとえられている（《おまえに似たあの国で！》）ことは、「湿った空」などについてすでにふれておいた、「女性と（その眼と）風土とのつながりを想起させる。）

71) J.-P. SARTRE, *Baudelaire*, Gallimard, 1963.

72) 《Causerie》 F. M. LV  
 Avec tes yeux de feu, brillants comme les fêtes,  
 Calcine ces lambeaux qu'ont épargnés les bêtes!

73) Y. BONNEFOY, *op. cit.*

74) 《Je n'ai pas oublié...》 F. M. XCIX  
 Et le soleil, le soir, ruisselant et superbe,  
 Qui, derrière la vitre où se brisait sa gerbe,  
 Semblait, grand oeil ouvert dans le ciel curieux,  
 Contempler nos dîners longs et silencieux,



この曇った空の  
 湿った太陽は、  
 涙の奥に妖しく輝く  
 おまえの眼のように、  
 深い神秘に  
 溢れた魅惑をぼくの心に注ぐ<sup>75)</sup>。

(「旅への誘い」)

こうして、詩人が一度はそこから墜落した、神のすまう大空、そこに光りかがやき詩人の眼を焼いた《火の眼》、すなわち神の眼差しを象徴する太陽は、詩人のイメージの造型のうち、地上的存在と融合する。しかしこのように幸福な例は、ボードレールの詩世界においてはきわめて稀であるといわねばならない。

---

75) <L'Invitation au voyage> F. M. LIII.

(Au pays qui te ressemble:)

Les soleils mouillés  
 De ces ciels brouillés  
 Pour mon esprit ont les charmes  
 Si mystérieux  
 De tes traîtres yeux,  
 Brillant à travers leurs larmes.